『東京大学言語学論集』**44** (2022.10) 75-91

接尾辞に基づいたエウェン語の品詞分類についての試論

鍛治広真
kajih@meikai.ac.jp

キーワード：語根　語彙素　語形　品詞　エウェン語　接尾辞

要旨

本論文ではエウェン語（ツングース諸語）における品詞分類について論じる。エウェン語では語根に接尾辞が付加されて語形が形成される。語形の統語的分布を品詞分類の基準とすると、語根の形態論的特徴について予測することができない。一方、語根の形態論的特徴を基準にした場合、品詞と接尾辞から語形の統語的特徴についての予測が可能になる。したがって語形よりも語根の特徴に基づいて品詞分類行うことが有用であると考えられる。しかし先行研究における形態論的基順による記述では、副詞など接尾辞が付加されないタイプの語根が除外されてしまっている。分類に統語論的基準を含めた先行研究においては、統語論的基準と形態論的基準の関係が明確でなく、語根と語形が混同されているという問題がある。本論文ではこれらの問題を解消するため、語根の形態論的な特徴を主要な基準にして品詞分類を行い、統語的な特徴を含めた副次的な基準を用いて品詞の下位分類を行う。語根にどのような屈折接尾辞が付加されるかを基準にすると、名詞類、動詞、不変化語類に大別できる。名詞類と動詞は付加される屈折接尾辞の種類によって区別される。名詞類には下位範疇として名詞、形容詞、人称代名詞、数詞、指示詞、疑問詞が含まれる。不変化語類は接尾辞の付かない語根で、副詞、接続詞が含まれる。

1. はじめに

本論文ではエウェン語[1]の品詞について論じる。エウェン語は主にロシア極東、特にレナ川流域以東のサハ共和国、マガダン州、カムチャツカ地方、チュコト自治管区、ハバロフスク地方、コリャーク自治管区に話者のいるツングース系の言語である。基本語順は SOV であり、膠着型の形態論を持つ。屈折や派生は接尾辞の付加によって実現する。

品詞を区別する要素として、意味論的特徴、形態論的特徴、統語論的特徴があるとされる（Beck 2002）。エウェン語では語根に派生接尾辞、屈折接尾辞が付加されることで語形が形成される。どのような接尾辞が付加されるかによって、その語形の統語的機能が予測できる（第2節にて後述）。しかしながら、様々な接尾辞が同じ統語機能を持つ語形を形成できる。例えば

[1] 本論文では次のような音素体系を想定した音素表記を用いる。引用に際してもこの方式に合わせて適宜表記を変更する。
短母音 /a ɪ o ʊ e[e~ə] i ɵ u/、長母音 /aa [aː] ɪɪ [ɪː] oo [oː] ʊʊ [ʊː] ɪa [jaː] ee [eː~əː] ii [iː] ɵɵ[ɵː] uu [uː] ie[jeː]/、子音 /p t č [t͡ɕ] k [k~x] b d ǰ [d͡ʑ~d͡ʲ] g [ɡ~ɣ] m n ň [ɲ] ŋ s[s~ɕ~h] w[w~ʍ] j [j~ç] l r[ɾ~ɾ̥]/ 口蓋化/’/は借用語にのみ用いる。

具格接尾辞と副動詞接尾辞はどちらも連体修飾機能を持つ語形を作る。そのため、語形の統語的特徴を品詞分類の基準にした場合は、語根の形態論的特徴について予測することができない。また Dixon (2004: 36) が指摘するように、意味論的特徴は異なる品詞の間で重なることがあるため、意味に基づいて品詞を定義し分類することも困難である。

語根にどのような接尾辞が付加されるかという形態論的特徴のみを基準とすると、エウェン語では名詞類と動詞の2つの範疇しか区別することができない。より細かく品詞を分類するには形態論的基準と統語論的基準を組み合わせて用いる必要がある。先行研究においても、統語論的特徴と形態論的特徴を品詞分類の基準に用いているものがあるが、基準同士の関係が明確ではない。本論文では形態論的特徴を第一の基準として用い、統語論的特徴は下位分類のための基準として用いる（第3節、第4節にて後述）。

以降では、第2節で品詞分類の対象となる単位を提示し、第3節では先行研究におけるエウェン語の品詞の扱われ方と問題点を概観する。その上で第4節では語根の品詞を名詞類、動詞、不変化語類の3つに大別し、統語的特徴も参照してさらに下位分類を行い各品詞の特徴を述べる。第5節では複数の品詞の特徴を持つ語根があることを指摘し、その具体例を示す。第6節はまとめの節である。

2. 語彙素と語形

品詞の認定を行うに当たって、まず語彙素と語形を区別する必要がある。語彙素は、基底形である語根に何らかの屈折接辞が付加されることで様々な語形として実現する（Dixon and Aikhenvald 2002）。例えばエウェン語においては、名詞語根に格接尾辞が付加されたり、動詞語根に定動詞接尾辞が付加されたりすることで、実際に現れる語形となる。[2]語根と接尾辞の組合わせによって様々な異形態の交替がある。したがって語根は必ずしも1つの定まった形があるわけではなく複数の異形態を束ねたものである。しかしながら表記上は煩雑になるのを避けるため、便宜的に異形態のうちの1つを代表として語根の表記に用いる。

表1 語彙素と語形

語彙素（語根）	語形	
oran「トナカイ」	oran	トナカイ．主格（～が）
	ora-m	トナカイ-対格（～を）
	ora-ň	トナカイ-具格（～で）
	or-ňʊn	トナカイ-共格（～と）
	oran-dʊ	トナカイ-与格（～に）
	oran-dʊla	トナカイ-処格（～のところに）

[2]正確には語根単独または「語幹と派生接尾辞」が語幹を形成し、語幹に屈折接辞が付加されて語形が形成される。すなわち名詞や動詞の語形は「語根（-派生接尾辞）-屈折接尾辞」という構造になっている。

oran-dʊlɪ	トナカイ-経由格（～のところを通って）
oran-takɪ	トナカイ-方向格（～へ）
oran-dʊk	トナカイ-奪格（～から）
or-ŋɪč	トナカイ-離格（～から）

品詞分類を行うときに語彙素（語根）を対象としているのか、語形を対象とするかで結果が異なる。語根を対象とするのであれば、どのような文法範疇が表示されるかという形態論的な基準が用いられる（Beck 2002）。いっぽう、語形を対象とするのであれば、どのような統語的機能を果たすのかという基準が用いられる。後者の場合は、主格形 oran「トナカイが」や対格形 ora-m「トナカイを」などは項である名詞、処格形 oran-dʊla 「トナカイ（のところ）に」は場所を表す副詞というふうに、格接辞の種類によって異なる品詞に分類され、したがって同一の語彙素に対して異なる品詞の語形が属することになる。また、統語論的な副詞句としての機能を持つ語形は不変化語類（後述）の副詞の他に、処格形を初めとする名詞の様々な語形、動詞の副動詞形がある。すなわち、統語的な特徴に基づき語形の品詞を分類した場合、同じ品詞の語形が様々なタイプの語根から作られる。したがって、語形の統語論的な品詞から語根の品詞を予測することはできない。よって本論文では語形を対象とする方針はとらず、語根を品詞分類の対象とする。語根の形態論的特徴に基づいた品詞分類の場合、そこから作られる語形の品詞は屈折接尾辞の種類から（主格形は統語的な名詞、処格形は統語的な副詞というように）予測することができる。

3. 先行研究におけるエウェン語の品詞

本節では先行研究においてエウェン語の品詞がどのように扱われているのかを概観する。分類の対象が何であるのかという観点でいえば、語形を分類するもの（第3.1節）、語根を分類するもの（第3.2節）、そして両者が混在しているもの（第3.3節）がある。

3.1. 語形の分類

エウェン語の記述研究において品詞分類を目的としたものは管見の限りないが、文法書における形態論の記述では語形に基づいて項目を立てて説明するものが多い（Novikova 1960, Lebedev 1978, Dutkin 1995）。Novikova (1960) では名詞、形容詞、代名詞、動詞、形動詞、副動詞、不変化詞（副詞、オノマトペ、間投詞、小詞、接続詞）が挙げられている。形動詞は動詞から派生した語として動詞とは別項目で扱われている。また、副動詞は法、時制を持たないことから動詞と同じ範疇にはまとめられないとしている。

この分類では同じ動詞語根から作られる語形である動詞、形動詞、副動詞の3つが異なる品詞として認定されている。この考えで行くと、名詞語根から作られる様々な語形は、2節で論じたように、統語機能に応じてさらに分類することが可能であるはずだが、分類されておらず一貫性が不十分である言える。

3.2. 接尾辞の種類による語根の分類

風間伸次郎（2003, 2022）は品詞分類について述べたものではないが接尾辞が網羅的に挙げられており、それらを名詞類（名詞及び形容詞類）に付く接尾辞と動詞に付く接尾辞に分類している。名詞類につく接尾辞は格接辞、所有者人称接辞、複数接辞といった屈折接辞と指小・指大辞、比較級接辞、所有接辞、譲渡可能接辞、所有名詞形成接辞、欠格接辞、場所名詞形成接辞といった派生接辞が含まれる。動詞につく接尾辞は屈折接辞（定動詞、動名詞、形動詞、副動詞を形成する諸接辞）と文法的派生接辞（ヴォイス、アスペクトの接辞とその他の派生接辞）が含まれる。

言い換えれば、どのような文法範疇が表示されるか、どのような接尾辞が接続可能であるか、という特徴から、語根が名詞類と動詞という2つの範疇に分類されていると捉えることができる。しかし、接尾辞の記述が主眼であるため、接尾辞の付かない語根の品詞については論じられていない。また形態論的特徴のみでは、名詞類と動詞類（とそれ以外）という区別より細かい分類は扱えないという限界を示している。

3.3. 語根と語形の混同された分類

Malchukov (1993) では主要な品詞として名詞類と動詞が区別され、名詞類には名詞と形容詞、代名詞、数詞と副詞が含まれる。これらの他に接語、後置詞、間投詞・オノマトペがあるとされる。副詞の中には名詞・数詞から派生したものと、派生的でない単純な副詞（soo [hoː]「非常に」、askɵt「ほとんど」）、時間名詞と同形の時間副詞が含まれるとされている。

Kim (2011) でも類似の分類が取られており、名詞類、動詞類、小詞・後置詞、間投詞の4つの品詞があるとされている。名詞は数、格、所有者人称の接尾辞が付くものとされている。形容詞、人称代名詞、疑問代名詞もこの範疇に含まれる。副詞は名詞類に含まれるものとして扱われているが、その理由を副詞の多くが名詞からの派生であることとしている。副詞の例として、名詞に具格接尾辞あるいは派生接尾辞の付いた語形を挙げているが、これは語根ではなく語形に対する分類である。後置詞は名詞と同じように人称語尾を取ることが可能とされており、後置詞は意味機能的な特徴に基づいて名詞と区別しているものと見られる。小詞は風間（2003）において接語として扱われているものに相当する。

Malchukov (1993) および Kim (2011) の分類では語根に対する分類と語形に対する分類が混在している。名詞類と動詞類を区別する特徴はどのような屈折接尾辞が付くか、ということを根拠にしており、これは語根に対する特徴付けである。一方、副詞を名詞類の中に含める根拠は「名詞類語根の屈折形であること」または「名詞類語根からの派生であること」である。これは語形に対する特徴付けである。

3.4. 小結

本節で見たとおり、先行研究における語形の特徴に基づく品詞分類は一貫性が不十分である。

一方、語根の形態論的特徴による分類は一部の品詞についてしか論じられないという問題がある。形態論的特徴だけでは語根の品詞分類に限界があることから、統語的特徴も分類に利用する必要があるが、分類の対象が語形であるか語根であるかは混同を避けなくてはいけない。

次節ではこれらの混同を回避するため形態論的基準と統語論的順を区別し、一貫して語根を品詞分類の対象とした分類を試みる。語根の形態的特徴を第一の分類基準として、統語的特徴は下位分類にのみ用いる。統語的特徴を基準として優先した場合、第2節で述べたとおり、同じ語彙素に属する語形が複数の品詞に分類されることになり、分類として有用ではないと考えられる。

4. 語根の品詞分類

本節では語根に対して品詞分類を行うための基準について論じる。一般に、統語的な観点からは名詞は述語の項になることができる語彙項目、動詞は述語になることができる語彙項目、形容詞は名詞を修飾することができる語彙項目とされる（Beck 2002）。エウェン語において項である語形には格（(1) の ulre-w）が、述語である語形には時制と人称（(1) の jep-te-n）が必須の要素であり、これらは屈折接尾辞で表される。

(1) etiken　　jʊʊ-la　　ulre-w　　jep-te-n[3]
　　老人　　家-LOC　肉-ACC　食べる-PRES-3SG
　　「老人は家で肉を食べた」(Malchukov 1995: 35)

一方で名詞項を修飾する語は、語根をそのまま語形として用いることができる。[4]

(2) sɔlaňa　　maitan
　　赤い　　スカーフ
　　「赤いスカーフ」

本論文では、第一にどのような屈折接尾辞が付加されるかという形態論的特徴に基づき、品詞分類を行う。そして、その語根から形成される語形の統語的特徴を補助的に用いて、語根のさらなる下位分類を行う。

形態論的特徴のうち、必須要素である屈折接尾辞が付くかどうかを基準にすると、屈折接辞の付加される語根と屈折接辞の付加されない語根が区別される。さらに屈折する語類は [1] 名詞類（第4.1節）と [2] 動詞（第4.2節）の2種類に分かれる。屈折しない語根は [3] 不変化語類（第4.3節）とする。これらの品詞の下位分類を行うには形態論以外の更なる基準が必要である。

[3] 例文の引用に際し表記とグロスを本論文の方法に合わせて変更している。
[4] 名詞修飾語であれば必ず語幹だけで形成されているという訳ではない。(4) に示すように何らかの語根に派生接辞の付いた語形が名詞修飾の機能を持つことがある。

表2　屈折を基準とした語根の品詞分類

屈折する	[1]（第4.1節）名詞類（名詞、形容詞、代名詞、数詞） [2]（第4.2節）動詞
屈折しない	[3]（第4.3節）不変化語類（接続詞、副詞）

4.1. 名詞類の特徴

名詞類は格接尾辞を直接付加することが可能な語類で、名詞、形容詞、代名詞（人称代名詞、指示代名詞、疑問代名詞）、数詞が含まれる。多くの名詞類には所有者人称接尾辞が付加できるが、代名詞には付かない。

仮に、「名詞」と「形容詞」の区別を意味的に規定したとしても、どちらにも共通して格接辞が付加されうる。したがって両者を形態的に区別することはできないため、同じ名詞類に分類される。eňi「力、強い」のように「名詞」「形容詞」の両方の意味および用法を持つ語もある。名詞と形容詞は形態的基準のみでは区別できないが、統語論的基準を考慮することで名詞と形容詞の区別が可能である。名詞類の中には名詞修飾用法において、前節の（2）のように被修飾語に所有者人称接尾辞の付かないタイプと、（3）のように被修飾語に所有者人称接尾辞が付くタイプがある。名詞類の下位分類として（2）のタイプを形容詞、（3）のタイプを名詞とする。

(3)　mʊran　　dɪl-a-n
　　馬　　頭-E-3SG
　　「馬の頭」（Kim 2011: 62）

第2節で述べたように、同一語根から作られた語形が文中で担う機能は必ずしも一つではないが、さらに同一語形であっても異なる統語的機能を果たすことができる。以下に名詞語根に所有接尾辞がついた語形が、形容詞句（連体修飾機能を持つ句）、名詞句（項になる句）、副詞句（連用修飾機能を持つ句）として用いられている用例を示す（Kaji 2014）。

［形容詞句（連体修飾）］

(4)　aawʊ-lkan　　bej
　　帽子-PROP　　人
　　「帽子を持っている人」

［名詞句（コピュラの補語）］

(5)　sii　　ɵkeň-i-lken　　bii-se-nri=gu?
　　あなた　　ミルク-E-PROP　　COP-PRES-2SG=CLT
　　「あなたはミルクを持っていますか？」

［副詞句（連用修飾）］

(6) aawʊ-lkan　　gɪrka-d-da-m
　　帽子-PROP　歩く-IMPF-PRES-1SG
　　「私は帽子をかぶって歩く」

（4）～（6）の例文では名詞語根に所有接尾辞-lkAn が付加されて形成された語形がそれぞれ異なる統語的機能で用いられてる。もし語形の統語的機能を品詞分類の基準にすると1つの語彙素に対してだけでなく、（4）と（6）では1つの語形 aawʊ-lkan に対しても形容詞と副詞という複数の品詞を割り当てることになり分類が複雑化してしまう。そのような分類より、格接尾辞を付加できるという形態論的な基準により、語幹 aawʊn-「帽子」を名詞類に分類し、接尾辞-lkAn は名詞類語根に付加され統語的形容詞・名詞・副詞の機能を持った語形を形成すると記述するべきである。そうすることにより、名詞類であるという語根の品詞性と接尾辞-lkAn の機能から、N-lkAn という語形の統語的な品詞性が説明できる。

以下では名詞類の下位分類の基準を論じる。下位分類にはどのような接尾辞が付くかという形態論的特徴に加えて名詞修飾用法で用いられるときの統語的特徴も基準として用いるが、分類の対象は語根である。

4.1.1. 名詞

名詞は次のような特徴を持つ。

(7) a.　格接尾辞が付く[5]
　　b　所有者人称接尾辞が付く
　　c　複数接尾辞が付く
　　d　名詞修飾用法の場合、被修飾語に所有者人称接尾辞が付く

(8) bɵɵdel-e-l
　　脚-E-PL　　「両足」

名詞は名詞項として用いられる無標の品詞である。名詞修飾用法（形容詞的用法）では（9）のように被修飾語に所有者人称接尾辞が付加される。

(9) mʊran　　dɪl-a-n
　　馬　　頭-E-3SG
　　「馬の頭」（Kim 2011: 62）（(3) 再掲）

[5] 格接尾辞の種類については表 1 に一覧を示したため、以降では例を省略する。

4.1.2. 形容詞

形容詞は名詞修飾に用いられる無標の品詞である。形容詞は次のような特徴を持つ。

(10) a　格接尾辞が付く

b　派生接尾辞 -tmar~tmer~dmar~dmer[6]「比較級」、-sta~ste「やや～」[7]、-sʊkan~suken「やや～」[8]が付く

c　-sɪ~si、-ňa~ňe、-tɪ~ti の形で終わる物が多い

d　被修飾語に所有者人称接尾辞を付けずに名詞修飾が可能である

（10）の c の特徴を持つ形容詞には以下のような例があるが、すべての形容詞に当てはまる訳ではない。

(11) gilsi「冷たい」　　sʊksi「暑い、熱い」

(12) ɪaldaňa「真っ黒い」　sʊlaňa「赤い」　čʊʊlbaňa「青い」

(13)　ňoobatɪ「白い」

形容詞は名詞修飾に用いられる品詞で、意味的には程度性のある性質を表すものが多い。そのため、比較級を形成する派生接尾辞 -tmar~tmer~dmar~dmer や程度性を弱める派生接尾辞派-sta~ste「やや～」、-sʊkan~suken「やや～」を付加することができる。

(14) sakarɪ-sta「黒っぽい」

名詞が名詞を修飾する場合（9）のように所有者人称接尾辞が付加されるが、形容詞で名詞を修飾する場合は（10）の d で述べたように、被修飾語に所有者人称接尾辞は付加されない（15）。

(15) egǰen　　bej

大きい　　男　　「大男」

4.1.3 人称代名詞

人称代名詞は次のような特徴を持つ。

---

[6] “~”は異形態の表記に用いる。

[7] sama-sta（シャーマン-sta）「儀礼用の衣裳を着ていないシャーマン」のように名詞から名詞を派生することもある。

[8] -sta~ste および-sʊkan~suken はともに形容詞の意味（程度）を弱める機能をもつ派生接尾辞だが、これに加えて sʊkan~suken は同時に否定的な評価を付加する機能がある。

(16) a　格接尾辞が付く
　　b　所有者人称接尾辞は付かない
　　c　再帰人称代名詞を除き、複数接尾辞は付かない[9]
　　d　派生接尾辞は付かない

人称代名詞の主格形は次の表の通りである。1人称、2人称、3人称、再帰人称があり、それぞれ単数と複数が区別される。1人称複数には包括形と除外形がある。

表3 人称代名詞

	単数	複数
1	bii	包括形 mut 除外形 buu
2	sii [hiː]	suu [huː]
3	noŋan	noŋartan
再帰	meen	meer

4.1.4. 数詞

数詞は次のような特徴を持つ。

(17) a　格接尾辞が付く
　　b　序数詞を派生することができる
　　c　proprietive（所有）の派生接尾辞-lkAn が付くと年齢・月齢を表す

序数詞は基数詞に接尾辞を付加して派生される（鍛治2010）。序数詞を派生する接尾辞は-ɪs~-is~-s（-Is）と-ɪtan~-iɪten~-tan~-ten（-ItAn）の2種類がある。[10]

表4 基数詞と助数詞

	基数詞	序数詞(-Is)	序数詞(-ItAn)
いくつ	adɪ	adɪ-s	adɪ-tan
1	ɵmen	ɵm-is	ɵm-iten
2	ǰɵɵr	ǰɵɵr-is~ǰɵɵg-is	ǰɵɵr-iten
3	ɪlan	ɪl-ɪs	ɪl-ɪtan
4	digen	dig-is	dig-iten
5	tɔnŋan	tɔnŋ-ɪs	tɔnŋ-ɪtan

[9] 再帰人称複数 meer は再帰人称単数の meen に複数接尾辞付いた形（mee-r）と解釈される。
[10] 2 種類の序数詞の意味・用法などの違いはないと思われる。-Is はサハ語の序数接辞-ɪs（江畑 2020: 53）に由来する借用形である。

6	ňʊŋan	ňʊŋ-ɪs	ňuŋ-iten
7	nadan	nad-ɪs	nada-tan~nad-ɪtan
8	ǰapkan	ǰapk-ɪs	ǰapk-ɪtan
9	ujun	uj-is~ug-is	uj-iten~ug-iten
10	mɪan	mɪaj-ɪs~mɪag-ɪs	mɪaj-ɪtan~mɪag-ɪtan
20	ǰəər mier	ǰəər mier-is	ǰəər mieg-iten
100	ňama	ňama-s~ňam-ɪs	ňam-itan
1000	tɪkɪča	tɪkɪča-s	tɪkɪča-tan
100万	miliən	miliən-e-s	miliən-e-ten

4.1.5. 指示代名詞、疑問代名詞

上記の他に指示代名詞、疑問代名詞が名詞類に含まれる。指示代名詞は指示詞に含まれ、疑問代名詞は疑問詞に含まれる。指示詞、疑問詞は名詞類だけでなく他の語類にまたがる横断的なカテゴリーを形成している（第5節に詳述）。

4.2 動詞

動詞語根も屈折接尾辞が付加される品詞だが、以下のような特徴で名詞類と区別できる。

(18) a　人称接尾辞が付く
　　b　定動詞接尾辞（テンス）が付く
　　c　形動詞接尾辞が付く
　　d　副動詞接尾辞が付く
　　e　アスペクト接尾辞が付く
　　f　ヴォイス接尾辞が付く

定動詞には定動詞現在と定動詞未来があり、（19）（20）のように「-定動詞接尾辞-人称接尾辞」の順で語根に付いて語形を形成する。

(19) saa-ra-m　　知る-定動詞現在-1単「私は知っている」
(20) saa-ǰɪ-m　　知る-定動詞未来-1単「私は知るだろう」

形動詞、副動詞は動詞語根にそれぞれの接尾辞が付くことで語形が形成される。定動詞は述語になるが、形動詞は（21）のように連体修飾、副動詞は（22）のように連用修飾機能を持つ。これらは統語的な性質に差があっても、同じ語彙素の異なる語形であり、形態論を基準として語根の品詞を分類する本論文の方針では動詞という同一の品詞にまとめられる。

［形動詞］

(21) em-če　　bej　　gɵɵn-ni
来る-PST.PTCP　　人　　言う-PRES.3SG
「来た人が言った」(Malchukov 1995: 17)

［副動詞］

(22) em-e-m-miňun　　em-de-ten　　e-le.
来る-E-DESI-COND　　来る-VN-3PL　　ここ-LOC
「来たいならここに来させよう」(Kim 2011: 98)

形動詞の語形は名詞・形容詞的な統語的性質を持ち、連体修飾用法、名詞的用法、述語的用法がある。（23）の連体修飾節は統語上の形容詞的性質、（24）の目的語と（25）コピュラの補語は統語上の名詞的性質を表している。

［連体修飾節］

(23) em-če　　bej　　gɵɵn-ni
来る-PST.PTCP　　人　　言う-PRES.3SG
「来た人が言った」(Malchukov 1995: 17)　（(21) 再掲）

［目的語］

(24) etiken　　em-če-we-n　　saa-ra-m
老人　　来る- PST.PTCP -ACC-POSS.3SG　　知る-PRES-1SG
「私は、老人が来たことを知っている」(Malchukov 1995: 21)

［コピュラの補語］

(25) bii　　em-če　　bii-se-m
1SG　　来る- PST.PTCP　　いる-PRES-1SG
「私は来た」(Malchukov 1995: 17)

上記のような形動詞の名詞性、形容詞性は語根（語彙素）の特徴ではなく形動詞接辞の補助があって成立するものである。また（24）の em-če-we-n に見られるように形動詞接尾辞の後ろに格接辞が付いていることから、形態論的にも名詞類の性質を有しているが、動詞語根が直接格接辞をとることはできない。em-če-という「動詞語根＋形動詞接尾辞」のかたまりが新たに作られた語幹として機能しており、形態論上の名詞的特徴は「動詞語根」ではなく「動詞語根＋形動詞接尾辞」という語幹に認められるものである。したがって接尾辞の種類で名詞類語根と動詞語根を区別するという基準の効力は失われない。本論文では語根に対して品詞を分類する

基準を論じているが、同様の形態論的品詞性は語幹にも認められる。

4.3. 不変化語類

屈折接尾辞が付かない語を不変化語類とする。不変化語類をさらに分類するには、意味や統語機能といった形態的特徴以外の基準が必要になる。これは（語根と同形の）語形の特徴を利用した分類基準ではあるものの、分類対象は一貫して語根であることに注意されたい。

4.3.1. 接続詞

接続詞は句と句、節と節の関係をつなぐ機能を持つ ňan「～と」がある。指示詞から作られる語形（tadɔk 「それから」tarıč 「だから」tarakam 「しかし」など）も接続詞の機能を持つが、それらは接続詞語根ではない。

4.3.2. 副詞

副詞は連用修飾に用いられる無標の品詞である。屈折接辞の付かない語類のうち、副詞句として連用修飾の機能を持つものを副詞とする。soo [hoː]「非常に」などが含まれる。これまでに述べたように名詞類に具格接辞、処格接辞などの接辞が付くと副詞句として機能するが、接尾辞の補助を必要とするため語根としての副詞には含まれない。統語的な機能としての副詞句になる（つまり連用修飾の機能を持つ）語形は不変化語類の副詞（すなわち副詞語根から作られる語形）だけではないことに注意されたい。

時間名詞の一部である語彙的時間ダイクシス表現は以下の（26）～（28）の例文に見られるように語根そのままの形で時間副詞として用いられる。一方で（29）のように、格接辞を付加することもできる。これらは名詞類と副詞の両方の性質を持つ語根といえる。

(26) <u>tımına</u>　adı　čaas-la　em-ji-nri
明日　いくつ　時-LOC　来る-FUT-2SG
「明日お前は何時に来るのか」

(27) <u>tiiniw</u>　ʊdan-ǰıd-dı-n.
昨日　雨が降る-PROG-PRES.PTCP-3SG
「昨日雨が降っていた」　(Kim 2011: 78)

(28) ňarı-kan　<u>tiek</u>　supkucek-le
男の子-DIM　今　学校-LOC
「坊やは今学校にいる」　(Kim 2011: 55)

(29) tɯmɯna-la　　ɪstala
　明日-LOC　　まで
　「明日まで」

5. 品詞横断的カテゴリー

第4節では形態論的な特徴を第一の基準とし、下位分類には統語的特徴も利用した品詞の分類方法を論じた。しかしエウェン語の語根の中にはこのような品詞の分類に収まらず、複数の品詞の特徴をもつものがある。本節で扱う語根は、前節までで分類した複数の品詞にまたがる特徴を持つものである。指示詞（5.1）と疑問詞（5.2）が、語形の機能の面でそれぞれ1つのカテゴリーを形成しているが、語根は複数の品詞の特徴を持っている。[11]

5.1 指示詞

指示詞には er-系（近称）「これ、この、ここ」と tar-系（遠称）「あれ、あの、あそこ」の2系列がある。指示詞は名詞類の中の名詞と形容詞を横断するカテゴリーであり、指示代名詞として名詞のようには格接辞が付いて語形が形成され（表5）、指示形容詞としては形容詞のように接尾辞を伴わない語形 er「この」tar「あの」で連体修飾が可能である。[12]

表5 指示代名詞

	近称「これ」「ここ」	遠称「あれ」「あそこ」
主	er-e-k	tar-a-k
対	er-e-w	tar-a-w
与	e-du	ta-dʊ
具	er-e-č	tar-a-č
共	er-ňun	tar-ňʊn
処	e-le	ta-la
経	e-li	ta-lɪ
方	er-teki	tar-takɪ
奪	e-duk	ta-dʊk
離	er-gič	tar-gɪč
方処	er-e-kle	tar-a-kla

[11] 下地（2018）によると、南琉球宮古語伊良部島方言では異なる語類に属する語が、機能的な観点から 1 つの類をなすことがあり、そのような類を機能類と呼んでいる。機能類として疑問詞、指示詞、代名詞、PC 語群（property concept words）が挙げられている。

[12] 指示詞や疑問詞以外にも複数の品詞の特徴をもつ語根がある。例えば ike-「歌」「歌う」、seejə-「輪舞」「輪舞を踊る」、sɪl-「スープ」「スープを食べる」など名詞類と動詞の両用が可能な語根が一定数存在する。しかしながら、これらの語根群を意味や機能の観点からまとめる範疇を認定することは困難であるため本節では扱わない。

方沿	er-e-kli	tar-a-klɪ
等	er-gečin	tar-gačɪn

また以下のように指示詞語根に派生接尾辞を付加して形成される語形もある。(30)（31）は形容詞の機能（連体修飾）を持つ語形、(32)（33）は副詞句の機能（連用修飾）を持つ派生語形である。

(30) er-rəəčin「このような」
(31) tar-roočɪn「あのような」
(32) e-čin「このように」
(33) ta-čɪn「あのように」

5.2. 疑問詞

疑問詞は名詞類、動詞、不変化語類を横断するカテゴリーで、疑問代名詞、疑問動詞、疑問副詞、疑問形容詞がある。

ɪa-「何」は疑問代名詞、疑問動詞である。疑問代名詞「何」として格接辞が付くことも、疑問動詞「何をする」として動詞の屈折接辞が付くことも可能である。

疑問代名詞には ŋii「誰」と ɪr「どこ」がある。これらには格接辞が付くことが可能である。

表6 疑問代名詞の語根と格接辞の付いた語形

語根	ɪa-「何」	ŋii- 「誰」	ɪr-「どこ」
主	ɪa-k[jaːk]	ŋii	ir-e-k
対	ɪa-w	ŋii-w	ir-e-w
与	ɪa-dʊ	ŋii-du	i-du
具	ɪa-č	ŋii-č	ir-e-č
共	ɪa-ňʊn	ŋii-ňun	ir-ňun
処	ɪa-la	ŋii-le	i-le
経	ɪa-lɪ	ŋii-li	i-li
方	ɪa-tkɪ	ŋii-teki	ir-teki
奪	ɪa-dʊk	ŋii-duk	i-duk
離	ɪa-gɪč	ŋii-gič	ir-gič
方処	ɪa-kla	ŋii-kle	ir-e-kle
方沿	ɪa-klɪ	ŋii-kli	ir-e-kli

疑問形容詞には adɪ「いくつ」がある。4.1.4にも含めているが、数詞と同じ派生接尾辞（序数詞、派生接尾辞-lkAn）の付加が可能であり、「疑問数詞」と言うこともできる。(34）は連体修飾の例、(35）は派生の例である。

(34) adı čaas-la　　いくつ 時間-LOC「何時に」

(35) adı-lkan　　いくつ-PROP「何歳/何ヶ月」

疑問副詞には ook「いつ」と ıamı [ja:mɪ]「なぜ」がある。どちらも接尾辞を付けないで語形が形成され、副詞として用いられる。ただし、ook「いつ」は「いつから」「いつまで」という語形では格接辞を伴った形が可能になるという点で、疑問代名詞の特徴を持つ。名詞と副詞の特徴を持つという点で時間名詞と類似している。

6. まとめと今後の課題

本論文では、従来混同されていた語根（語彙素）と語形の品詞分類の区別を明確にし、語根の形態論的特徴、すなわち語根にどのような屈折接尾辞が付加されるかを第一の基準として、エウェン語の語根の品詞分類を示した。接尾辞の種類によって名詞類、動詞類、不変化語類に大別することが可能であることを示した。各品詞には下位範疇があり、その分類基準は形態論的基準に加えて、統語的な特徴を参照した下位分類を試みた。本論文では語根の品詞分類の基準を示すことは、語形の統語的特徴の説明にも役に立つという考えから、語根の品詞分類を行うことを明確にし、形態論的特徴を統語論的特徴より優先する分類方法を提案した。

形態論的な基準での分類では「語根+形動詞」が格接辞を取るなど名詞的特徴を持つと述べたが、「語根＋派生接尾辞」で形成される語幹も同じように接尾辞を基準として品詞を認定することが可能と考えられる。

形態論的特徴を品詞分類の基準としながら、統語的特徴も参照することで品詞の下位分類を行ったが、clitic、オノマトペなど先行研究で挙げられている不変化語類が扱えておらず、下位分類はまだ十分とは言えない。意味特徴や統語的分布を考慮し、下位分類をより精密に行うことを今後の課題としたい。

略号一覧

1: 1人称, 2: 2人称, 3: 3人称, ACC: 対格, CLT: クリティック, COND: 条件, COP: コピュラ, DESI: 願望, DIM: 指小辞, E: 挿入母音, FUT: 未来, IMPF:未完了, LOC: 処格, PL: 複数, POSS: 所有者人称, PRES: 現在, PROG: 進行, PROP: 所有, PST: 過去, PTCP: 形動詞, SG: 単数, VN: 動名詞

参考文献

Beck, David. 2002. *The typology of parts of speech systems: the markedness of adjectives.* New York, London. Routledge.

Dixon, R. M. W. 2004, Adjective classes in typological perspective. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald eds. *Adjective classes: a cross-linguistic typology*. 1-49. New York. Oxford University Press.

Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald. 2002. Word: a typological framework. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald eds. *Word: a cross-linguistic typology.* 1-41. Cambridge. Cambridge University Press.

Dutkin, Kh. I. 1995. *Allaikhovskij govor evenov jakutii (Allaikha dialect of Ewens in Yakutia).* Sankt Peterburg. Nauka.

江畑冬生. 2020. 『サハ語文法　統語的派生と言語類型論的特異性』東京. 勉誠出版

鍛治広真. 2010. 「エウェン語の形態音韻論における数詞の特異性」『東京大学言語学論集』30. 71-82.

Kaji Hiromi. 2014. Proprietive suffix -lkAn in Ewen. *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology.* 1(3). 35–42.

風間伸次郎. 2003. 『エウェン語テキストと文法概説』ツングース言語文化論集23. 吹田. 大阪学院大学情報学部

風間伸次郎. 2022. 『エウェン語アルカ方言の研究』ツングース言語文化論集69. 東京外国語大学

Kim Juwon. 2011. *A grammer of Ewen*. Seoul. Seoul National University Press.

Lebedev, Vasilij Dmitrievich. 1978. *Jazyk evenov jakutii (The language of Ewens in Yakutia)*. Leningrad. Nauka.

Malchukov, Andrej L. 1995. *Even (Languages of the world: Materials; 12)*. Munchen. Lincom Europa.

Novikova, K.A. 1960 *Ocherki dialektov evenskogo jazyka: ol'skij govor: chast' 1 (Sketches of dialects of Ewen language: Ola dialect: part 1).* Leningrad. Nauka.

下地理則. 2018. 『南琉球宮古語伊良部島方言』東京. くろしお出版

An Essay on Classifying Parts of Speech According to Suffixation in Ewen

KAJI Hiromi
kajih@meikai.ac.jp

Keywords: parts of speech, lexeme, word form, Ewen, suffix, root

Abstract

This paper discusses the classification of parts of speech in Ewen (Tungusic). In Ewen, word forms are formed by adding suffixes to word roots. It is impossible to predict the morphological characteristics of roots from syntactic distribution of word forms because different word forms show the same syntactic distribution. On the other hand, it is possible to predict the syntactic distribution of word forms based on the part of speech of a root and suffixes which composes the words. Therefore, a classification of part of speech based on characteristics of roots rather than word forms can be useful. However, a description based on morphological characteristics in a previous study excludes roots that do not take a suffix. In previous studies that included syntactic criteria in the classification, the relationship between syntactic and morphological criteria is not clear, and there is confusion between roots and word forms. In order to address these problems, the present paper uses morphological characteristics of roots as the primary criterion for classification, and sub-classifies parts-of-speech using secondary criteria, including syntactic characteristics. According to the type of suffixation, roots are classified into nominals, verbs, and indeclinables. Nominals and verbs are distinguished by the type of inflectional suffix added. Nominals include nouns, adjectives, personal pronouns, numerals, demonstratives, and interrogatives. Indeclinables include adverbs and conjunctions.

（かじ・ひろみ　明海大学）